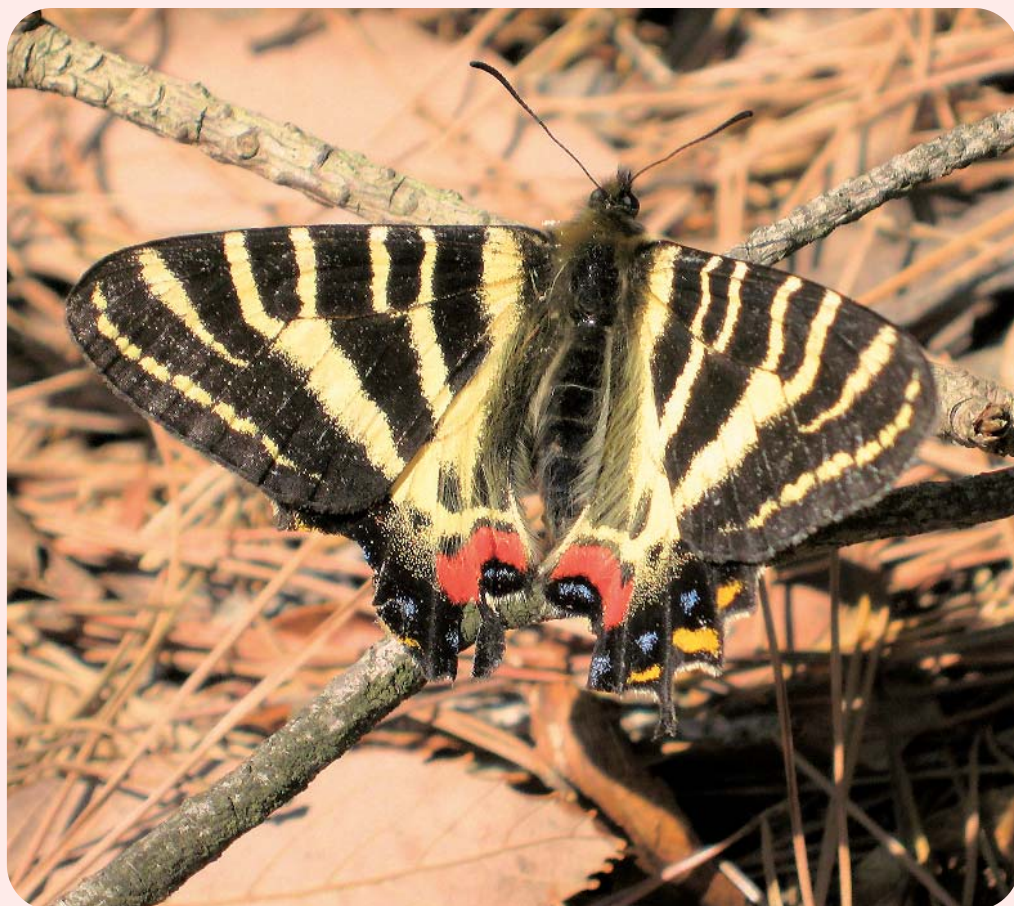


## ギフチヨウ



かんきょうしょう ぜつめつ き く  
環境省指定絶滅危惧種、鳥取県指定絶滅危惧種  
さいはく  
旧西伯地区にて

(撮影：桐原真希)

かつて千葉県に住んでいた私は、友人たちとギフチヨウを観察するために、まだ雪が所々に残る山形県へ何度か足を運びました。当時の私にとってギフチヨウは、自宅から遠く離れた東北地方に旅をしなくても出会いたい、憧れの生き物だったのです。

そして南部町に住むようになり、町内で初めてギフチヨウと出会った時、「まさか、ギフチヨウがいる町に住むことができるなんて…。」そう口からこぼれ出ました。しかも、自宅から自転車で行ける場所に飛んでいるとは、なんて贅沢なことでしょう。私は、南部町の自然の豊かさ、懐の深さに衝撃を受けました。ちょうど、ソメイヨシノの開花シーズンとぴったり重なるギフチヨウの出現は、早春の日本の財産といえる光景です。しかしながら、そのギフチヨウを取り巻く今日の環境は、決して安泰とはいえません。かつて、人々は落ち葉を集めて堆肥にし、薪を燃料に使い、つる植物でカゴを編み、と様々な形で里山を利用し、手入れをしてきました。

しかし、近年の生活スタイルの変貌によって人が山に入らなくなり、日本の山林はすっかり荒れてしまいました。藪と化した雑木林は、林床に光が届きません。すると、ギフチヨウの幼虫が食べるカンアオイ類や、成虫が蜜を吸いに訪れるカタクリやスマレの仲間が芽を出さなくなります。幼虫と成虫の食べ物が揃っていないと、その虫は命をつなぐことができません。山の維持管理が行き届かなくなったことに加え、愛好家の乱獲や生育環境の乱開発なども、現在のギフチヨウの絶滅の危機に追い込んでいます。

南部町のギフチヨウは、主にコバノミツバツツジやヤマザクラ、キブシなどの樹の花の蜜を吸っていて、幼虫はミヤコアオイを食べ育てています。これらの植物も見かけることが少なくなりました。町内のギフチヨウを保全する要は、雑木林の適切な管理です。「春の女神」と称される可憐な蝶が、未来の南部町でも舞い飛ぶことを願っています。

自然観察指導員 桐原真希